
こんなこと あんなこと

ももぷに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなこと あんなこと

【コード】

N81190

【作者名】

ももぷに

【あらすじ】

エッセイ集です。小さい頃の思い出話や、思わず笑ってしまうような話など、いろいろ書いています。肩の凝らない話です。ちょっとした小休止にどうぞ。

あいまいな記憶はいつだって（前書き）

少しずつですが、エッセイを書きとめようと思います。もともと、ブログに投稿していた話を新しく編集し直しています。ブログ記事だけでなく、新しい話も書くことと思っています。

あいまいな記憶はいつだって

うちの母は、なにしろ、なんでも見たがる。学校のプリントやテストならわかるが、日記帳でも、私宛の手紙でも、なんでも読んでしまう。

もちろん、文句をいったこともある。そんな時には、知らぬ存ぜぬで、かわされてしまう。本当に困った母なのだ。

ある日、私の日記帳が、テーブルの上に置き去りになっていた。

（んん？ なんだだ）

どうやら、母がこっそり読んでいるらしい。そこで、日記にこう書いた。

「母が日記を盗み見るので、困る」

次の日、日記を見てみると返事が書いてあった。

「すみませんね。見えただけです」

本当に、困ってしまう。

あいまいな記憶はいつだって（後書き）

思い出つて、忘れたい思い出も多いけど、忘れたくない思い出も、たくさんある。そんな記憶の断片をちりばめて書いています。あなたにとって、忘れられない思い出はなんですか？

方向音痴にもほどがある(前書き)

うちの母、ひどい方向音痴なんです。信じられないほどの、方向音痴話を書きます。

方向音痴にもほどがある

なにが信じられないって、うちの母親の方向音痴ぶりには、びっくりします。

みんなで母の実家に、車で里帰りしたときの話です。

当然、自分の実家だから、道くらい覚えていて当たり前だと思っていました。

ところが、母は道がわからないと言つのです。

そこで、車を降りて、酒屋さんに入り、道を聞くことにしました。

母は開口一番。

「私の家は、どこですか？」

そんな！！ わかるわけないよ！！！！

また、ある時は、どうしても道がわからず、家の縁側に座っていたおばあさんに道を聞いた時のこと。

「あの、　　さんちは、どこですか？」

するとおばあさんが、こう言ったのです。

「何言っているの。ここは、あなたの家でしょ」

あるつことか、自分の母親に、道を聞くなんて、考えものだと思います。

こんな方向音痴の母でも、保険の外交員として働き、歩いてほうぼうの家を訪ねたのだから、ちよっとびっくりです。

病院でくつろぎモード（前書き）

母が病院に入院し、大手術をしたときの話です。

病院でくつろぎモード

うちの母は、大げさなんです。何事にも。

小さいことでも、大きく広げて、おおごとにしてしまうんです。

そんな母が入院することになり、またまた、大変でした。

「ああ、あれがない」「これがない」

から始まり、ネグリジェから、温かい靴下から、ベッドに置くクッションまで買わせ、

いつのまにか、大荷物になってしまいました。

もともと、入院時の荷物からして、多かったです。

さらに追加して買っているうちに、とてつもない量になってしまいました。

まるでひと世帯分、持ってきてしまったかのよう。

お見舞いには、なるべく行くようにしてましたが、

行きたびにテレビを見て、熱心にメモをとっています。

なんのメモかと思ったら、

テレビショッピングの買いたいものリストだそうです。

「絶対に買う」

と、言い張っています。

しかもそのテレビ、ほとんどのチャンネルが、テレビショッピングだそうで、

テレビショッピング大好きな母には、夢のようなテレビです。

手術が終わったばかりの頃は、さすがにぐったりして一日中、夢の中にいましたので、普段ほど悪たれ口を叩いては、いませんでした。

が

回復を少しずつしてきて、起きている時間が増えてきました。

しまいには、「これ便利なのよ」と言いながらポンポンあんまのボールの部分で、ベッドの明かりをつけたり消したりしているのです。

そして先生に、「私は死ぬんですか?」と、聞き、「100%ありません」と、言われても不安な顔でいたりもしました。

それでも、退院の日は近づいていました。母は、「まだ、回復していないから、出たくない」と、ごねましたが、結局、出されてしまいました。

病院にいた期間は、一か月です。

それよりなにより大変だったのが、母の大荷物です。持ってくるのも大変だったけど、帰りも大変でした。

着ないで終わってしまったネグリジェが、未だに母の実家のタンスに眠っています。

着ないなら買わせないで!!!

丁寧なのはいいけれど(前書き)

心配症のうちの母。ちょっと度が過ぎていきます。

丁寧なのはいいけれど

私が病気で入院したとき、パジャマを宅配で送ってくれたんです。うれしいなあと、感動していたのですが、良く見てみると、刺繍がズボンの前の部分にしてあるのです。

え??? なんて刺繍したんだろう。

よくよく、観察すると

緑のパジャマに、黄色い糸で

私の名前が、刺繍してありました。

しかも、それだけでは、ありません。

パジャマのズボンの内側と外側にも、何やら刺繍が施してあります。読んでみると、そこには、

「マエ」「ウシロ」

と、刺繍されているのです。

もちろん、すぐに、ほどきましたが、母にとって、私はいくつになっても子供なのでしょうか？

などと思っていたら、

ある日、母がプレゼントをくれました。

それは、母が愛用していた骨盤ベルト。

そこにはしっかりと、マジックで、

「上」「下」「正面」「右」「左」と、書かれていました。

ベルトには上下がわかるように、イラストがついているので、それくらいわかりそうだけど…。

丁寧なのか、心配症なのか、
微妙な母でした。

餃子で大失敗（前書き）

友人を呼んでの夕食会。美味しい手料理を御馳走しようとして、大失敗してしまったそうです。

餃子で大失敗

母は、一人暮らしをしているのですが、料理があまり好きでないそうで、

あまり手料理らしきものを作らずにいるそうです。

そんなある日、母の友人が遊びに来ることになり、夕食を一緒に食べようという話になったそうです。

その頃の母は、何故だか、餃子に憧れていて、餃子の作り方がのっている雑誌を購入して、

「一度でいいから、美味しい餃子を作ってみたい」と、申ししていました。

そこで、母は、友人に餃子をふるまうことを決めたのです。

そして、当日。

母は気合を入れて、餃子を作ったそうです。

しっかりこねて、形よく作り、焼く時は水を入れて、

完璧なはずでした。

ところが、出来上がった餃子は、カッチカチだったそうです。

何がいけなかったのか、私に電話で聞いてきました。すると、問題点が、続々出てきたのです。

「餃子をね、白菜入れて、こねてから、水をしばったの。ぎゅーっ

と」

え？ え？ だめだよ！！ 水気を切りすぎたら、
ばさばさになるんじゃないの??

「それから、水を餃子がかぶるくらいに入れて」

ちよ、ちよっと！ 水入れ過ぎ！！

「水が無くなるまで、しっかりと焼いたの」

それじゃあ、固くなるの当たり前。
焼き過ぎです。

「私のどこが、いけなかったんだらう」

全部です。はい。

「友達に食べさせるから、いつもより気合入れたのに……」

気合入れ過ぎ。

それ以来、母の餃子熱が冷めてしまいました。

でも、子供のころ、母の手作り餃子を食べた記憶があります。
その時は、こんなもんだらうと思っていました。

餃子は、ある程度固いものだと思っていたのです。

やっぱり母の餃子は、どこかすごいぞ。

お弁当で恥をかく(前書き)

母のお弁当、作るのが大変なのはわかるけど、手を抜き過ぎじゃないの？

お弁当で恥をかく

私、母のお弁当を学校や職場に、持って行った記憶があまりないんです。

幼稚園から高校まで、ずっと給食でした。

そして、大学では、夜間学校だったので、ほとんど学食。社会人になってからは、自分で作って持って行ってました。

それでも、時々、学校にお弁当を持っていかなくては、いけない日がありました。

最初に衝撃を受けたのは、忘れもしない中1の春。

部活で初めてのお弁当で、先輩たちと机を並べて食べた日のことです。

大きいお弁当箱でした。

うちで一番大きいタッパーにお弁当が入っていました。

大きくて恥ずかしいな、などと思いつつも
中を開くと、そこには、

大量の白いご飯と、おかずのハム3枚。
それだけです。

しかも、ハムは丁寧に半分に切ってありました。

先輩達は、すぐ正面で美味しそうなお弁当を食べています。
あまりにも恥ずかしくて、隠しながら食べました。

さらに、変わったものが入っていることが、ありました。

それは、枝豆。

普通、お弁当に枝豆は、入れるのでしょうか？

おばさんになった今では、なんとも思いませんが、
まだ、中学生だった私は、なんとなく恥ずかしくて、
残してしまいました。

その他、遠足のお弁当のおかずが、ウインナー2本だけなんて、
ともありました。

海へ遠足に行った時のことです。

お弁当を砂浜においてみんなで遊び、
さあ、食べましょうとなった時、ふたを開けてみると、
私のお弁当は、砂だらけでした。

お弁当が、バスケットに入っていたため、
砂が入り込んでしまったのです。

今は、主人のお弁当を作ったりしていますが、
とても困っています。

お弁当というものが、よくわからないのです。

みんなが食べているようなお弁当が、作ってみたい。
でも、どこかが、違う。

悠む毎日です。

それって変だよ(前書き)

母の服のセンスは、微妙です。なんでそんな服を着ているのか、それよりもどこで、そんな服を売っているのか、聞いてみたいものです。

それって変だよ

母の服には、私が付けた名前がある服がある。

一つ目は、メキシカンセーター。

テンガロンハットをかぶった、おじさんたちが、
陽気にギターをかき鳴らすイメージの洋服。

色彩のセンスが、絶妙で、

なんとも言えず、メキシコを思わせる服です。

二つ目は、おおや まさこブラウス。

昔、いらした、大金持ちのおおや まさこさんを思わせる洋服です。

覚えていらっしやるでしょうか？

フリフリの服を着て、「おとうちゃん」が口癖だった女性です。

彼女の服の特徴は、裾がフリルということ。

母の服は、変な感じに裾がフリル。

へそのすぐ下が、もう、フリル。

その服を着た母は、まるでバレリーナのようにも見えました。

三つ目は、もぐちゃんズボン。

命名したのは、父です。

結婚する前から、母がはいていたズボンで

何故、もぐちゃんなのかは、不明です。

でも、母は、洋服をとて大切に着るので、
すべての服が、未だにあります。

もぐチャンズボンなど、実に40年以上タンスにしまっております。

普段はおしゃれなのに、時々、外した格好をする母。
やっぱり、わざとなんですかね。

私は、もう大丈夫（前書き）

大病をして、元気になったとはいえ、やはり、高齢の一人暮らし。いろいろな問題が、でてきます。

私は、もう大丈夫

「私は、もう大丈夫だから」

母は、たびたび、口にしていました。

大病をして手術をし、一緒に暮らそうと話しても、一人がいい、嫌だの一点張り。

ですが、体はそう簡単には、元の元気な状態に戻りません。もう大丈夫というたびに、必ず、問題が発生しました。

最初に、「もう大丈夫だから」と言われたその日、突然、母が電話口で苦しみ始めました。

「うー、うー」と言って、

今にも死にそうです。

大慌てで、偶然家にいた主人と車を飛ばし、実家へ。

母は、「来なくていい」と、強がっていましたが、

そういう状況では、なさそうでした。

家に着き、合鍵で家に入ると

台所の隅で、母がうずくまっています。

こりゃあ、大変だとすぐに救急車を呼び、病院へ。

診断結果は、腸閉塞でした。

このまま、放っておいたら、死んでしまうところだったとまで言われました。

それから、何度か、もう大丈夫だからといわれ続けてきましたが、そのたび、問題が発生し、病院へ。

ある日、実家に寄った際、母が手紙をくれました。でも、そのすぐ後で、また、具合が悪くなり、病院へ。家に帰り手紙を見てみると、そこには、

「私はもう大丈夫だから」と書かれていました。

それ以来、「もう大丈夫だから、は、禁句だね」と母は、笑って言います。

その通りなのか、ジंकスなのか、そのセリフを言わなくなっただけか、

大きく調子を崩すことがなくなりました。

高齢の一人暮らし。もちろん心配です。

なるべく電話をかけ、安否確認をしていますが。

今は一人が楽しいと言っています。

いずれは一緒に暮らすようにしようと、

主人とも話しています。

それまでに、せめて母の悪い癖

人の物を勝手に見ることを

改めてもらえると、うれしいなと感じています。

クリスマスの迷惑な客（前書き）

あれは、もう、ん十年前のクリスマス。普段やらないことをするとんでもないことになるという見本のようなクリスマス会でした。

クリスマスの迷惑な客

我が家では、普段、クリスマスを祝いません。

それは、父の一言。

「うちは、仏教だ」

それに対し、文句を言つと、

「ここは、日本だ」。

しかたがないので、

毎年クリスマスを家で祝うことがなく、
なんとなく寂しい思いをしていました。

もちろん、サンタさんが来てくれたこともなく、
幼かった頃には、何故、家にサンタさんが来ないのか
自分なりに分析していました。

その答えは、

家には煙突がないので、
窓を閉めてしまうから
サンタさんが、入ってこれない。

と、いうものでした。

そこで、窓を全開にして寝て、
次の日、風邪をひいていたものです。

そんなある年のクリスマス。
母が、「今年は、クリスマスを家で祝おう」

と、言いだしました。

ケーキを用意し、
ツリーを飾り、チキンを並べ、
さあ、これからというとき、

「ぴんぽーん」

お客さんです。

母が、玄関に行く

そこには、スーツ姿の男性が…。

そして、長々と商品の説明を始めたのです。

なんでも、「金」を売っている会社で

毎日、会社には、大勢の奥様が訪れ
金を争うように買っていく。

買うなら、今です

と、言う話でした。

我が家には、金を買う余裕などなく、
もちろん、母は断りました。

でも、それでも、引きさがらない男性は、
母を説得し続けました。

そして、ついに

母は、しつこい勧誘を撃退。

気付けば、時間は、
6時間たっていました。

男性は、帰り際、

「この貧乏家族」

との捨て台詞を残し、去っていきました。

その後、クリスマス会がどうなったのか、
それ以来、クリスマス会が行われなかったことから、
想像できるでしょう。

普段やらないことは、やらないほうがいい。
そんな教訓の残る、一日でした。

ちなみに、その時に来た男性の会社は
大事件に発展し、役員は、詐欺で逮捕されました。

そう、知る人ぞ、知る、豊田商事でした。

ああ、怖。

家が貧乏で、よかったのかもしれませんが。

> i 1 3 9 5 7 — 1 9 4 0 <

時々でてるおかしなメニュー（前書き）

私が、自宅にいたころ、母が料理を作ってくれていましたが、時々、おかしなメニューが登場しました。

時々でてくるおかしなメニュー

それは、ないでしょうと、思う料理が、時々、登場する食卓でした。

まず、びっくりしたのが、その日の夕飯は、そうめんだったのですが、なんと、ご飯まで登場。

ご飯のおかずが、そうめん。不思議でした。

それから、違うでしょう「しゃぶしゃぶ」。

鍋にお湯が沸かされ、そこにお肉をいれて、しゃぶしゃぶとしてから、食べようとしたところ、母から、クリームが！！

「違う。もっと、よく煮て食べないといけない」

そして、母は、

自分用の肉や野菜が入っている皿の中身をざざざーっと、鍋に投入。ぐつぐつ、煮始めたのです。

いくらなんでも、

それは、違うでしょう。

しゃぶしゃぶじゃなく、ただの肉と野菜のお湯煮。

その感覚が、よくわからない…。

そして、子供のころ、
家の近所のお肉屋さんで、
毎日、味付きのホルモンを焼いていて、
試食販売をしていたのですが、

私は、そのお肉のファンで、
毎日のように通いつめていました。

その味付き肉を食べたいと母に頼んでいましたが、
なかなか買ってもらえずにいました。

ところが、ある日、母がその味付き肉を買ってくれたのです。

でも、食べてみると、味が違う。

なんでなんだろう。

お店と家の味付けが、違うのは仕方ないのかな
などと、考えていたのですが、

その後、ある事実が発覚しました。

母は、なんと、

買ってきたホルモンを一度洗い、
自分で味付けをしていたのです。

そりゃあ、違はずです。

最近、母の手料理を食べる機会が減り、
あの頃の、なんだか変わった料理が懐かしいなと
しみじみと感じている今日この頃なのです。

>
i
1
3
9
4
4
5
—
1
9
4
0
<

ちょっといい話(前書き)

毎回、ふざけた話を書いているので、今回は、いい話を書こうと思います。私が、お母さんにももらって、感動した話です。

ちよつといい話

あれは、忘れもしない中3の冬。

そう、まさに、受験のシーズン真っ只中。

私は、まず合格しないであろう難しい高校を希望していて、99%合格できないと、言われていました。

でも、どうしても、その学校に行きたかった。

そこで、受験勉強をがんばっていました。

塾にも通い、夏には勉強の合宿にまで参加したものです。

そして、試験が終わり、

発表の日が、やってきました。

その日、母は約束してくれました。

「合格したら、すき焼きだよ」

合否の発表は、テレビでやります。

私は、発表が映し出されるのを

じっと待っていました。

そして、私の受験した学校の発表が。

合格したのは、女子では「2名だけ」。

その中に私は…。

その後で、学校へ行き

先生からも、はっきりと合否を知らされ

家へと帰りました。

家に入ると、結果を知っている母が、すき焼きを用意していました。

母は、「がんばったんだから、合否はいいの」などと言いつつ、すき焼きを作っています。

「え？　なんで？　落ちたのに……」

そう、奇跡は起きず、不合格。

でも、心の中に幸せを呼んでくれた
素敵な合格発表となりました。

あの時は、本当にありがとう。
うれしかったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119o/>

こんなこと あんなこと

2011年10月8日05時33分発行